

## 人体解剖学の専門書『全体闡微』の解剖学用語について

On anatomical term of the reference book of human anatomy *Quanti chanwei*

松本 秀士

### 提 要

美国人医学传教士柯为良在华期间所编辑的《全体闡微》，实际上是近代中国第一部人体解剖学教科书。而是因为它拥有英汉解剖学名词词典，也可以说是近代中国第一部英汉解剖学名词词典。本稿通过解剖学系统上的观点来进行了分析，《全体闡微》所译定的解剖学名词，而指出了合信所编辑的《全体新论》和《医学英华字释》并不是拥有严格意义上的解剖学专门性。

### 0. はじめに

ホブソン(Benjamin Hobson 1816-1873 中国名;合信)の去った後の中国では、カー(John Glasgow Kerr 1824-1901 中国名;嘉約翰)を中心とする医療宣教師によって、本格的な専門レベルでの中国文西洋医学書が次々と編訳されていった。こうしたポストホブソンの流れの中で人体解剖学の専門書として編訳されたのが、オスグッド(Dauphin William Osgood 1845-1880 中国名;柯為良)らによる『全体闡微』(1881)である。本稿では、『全体闡微』で確定された神経系の解剖学用語を中心に検討した。

### 1. 『全体闡微』の概要

ホブソンによる一連の中国文西洋医学書『西医五種』は<sup>1</sup>、近代中国における西洋医学移入の初期的役割を果たしたことで注目されてきた。特に『西医五種』の筆頭である『全体新論』(1851)<sup>2</sup>は、西洋医学が最も基礎とする人体解剖学に関する内容を含み、多数の人体解剖図を掲載することから、近代中国における西洋医学の起点的医学書として評価されてきた。しかし、ホブソンに続く来華の医療宣教師のホブソンに対する評価では、『西医五種』は単なる西洋医学の概要を伝えたにしか過ぎなかった<sup>3</sup>。そして、人体解剖図を多数掲載する『全体新論』の実際の内容も、あくまで解剖学の概要を扱ったものであった。

ホブソンが去った後の中国では<sup>4</sup>、依然として中国文による本格的な人体解剖学の専門書が存

在しなかった。こうした背景の中、1877年に来華宣教師の集会在上海で開かれた。この集会の決議により、中国文による人体解剖学の専門書の編纂がオスグッドの手に託され、そして刊行するに至ったのが『全体闡微』である<sup>5</sup>。『全体闡微』は、福州で宣教活動を行った米国出身のM.D.(メディカルドクター)オスグッドを中心に編纂された中国文による人体解剖学の専門書で、1881年に刊行されている。オスグッドは刊行直前の1880年に福州の地で熱中症により没したが、1877年の来華宣教師集会の決議を受けて編訳されたものであることから、カーを中心とする医療宣教師の活動の中においても、本格的な人体解剖学の専門書として重要視された。そして、『全体闡微』で中国語に訳出された解剖学用語が、後の中国文西洋医学書編纂編訳における標準となっている。つまり、『全体闡微』は実質上、近代中国で初の人体解剖学の専門書として、医療宣教師に幅広く支持されたということで、非常に重要な意義をもつものである。

『全体闡微』は全六巻三冊構成である。巻ごとに主な内容、葉数、掲載される人体解剖図の数を以下の表1にまとめた。巻一は骨格系、巻二は筋系、巻三は心臓・動脈系・静脈系・リンパ系、巻四は神経系、巻五は呼吸器系・消化器系・泌尿器系・生殖器系、巻六は感覚器系、および鼠径部と会陰部の局所解剖を主に扱っている。そして巻末には、原語(英語)の解剖学用語と、これに対する中国語訳をまとめた *anatomical vocabulary in English and Chinese* が付される。つまり、『全体闡微』は解剖学用語の英語-中国語対訳表を明示することによって、本格的に解剖学用語の中国語訳を確定する作業を行っている。

巻次	主な内容	葉数	解剖図数
巻首	序・目次	9	0
一	総論・全体各骨論・全体各骨節論	69	94
二	全体諸膜論・全体諸肌論	44	34
三	心論・脉管論・廻管論・微管論・吸管並吸核論	60	47
四	脳論・脳脊根論・脳筋論・脊脳筋論・脳筋結論・自和脳筋論	37	32
五	胸論・腹部論・陽具論・陰具論	32	44
六	五官論・[月夾]部論・尻肛会陰部論	17	22
巻末	<i>anatomical vocabulary in English and Chinese</i>	23	0
合計		291	273

表1 『全体闡微』の構成

## 2. ホブソンによる『医学英華字積』について

吉田(1997)では、ホブソンによる『医学英華字積』(1858)を近代中国ではじめての英語-中国語対照による医学用語辞典と認識している<sup>6</sup>。確かに『医学英華字積』の英文書名は *A medical vocabulary in English and Chinese* であるが、実際は中国文書名通りに英文医学語彙の中国文による字積が主旨である。従って、今日的な辞書の体裁である単語レベルでの英中対照が、全ての

見出し語に施されたわけではない。つまり、全ての医学用語に対して、中国語による訳語が示されたわけではなく、また、訳語が示されたとしても学術用語としての要求を必ずしも満たしていない。

また、吉田(1997)は『医学英華字釈』に掲載される見出し語の全てを用語とみなした上で約2200と数えているが<sup>7</sup>、正しくは2043である。見出し語の実際の内容についても、その全てが用語というわけではなく、事象を説明する文章であるものが多数含まれる<sup>8</sup>。

英文項目名	中国文項目名	見出し語数	解剖学
The Osseous system	全体之骨	90	90
The Articulations	全体交節	26	26
The Muscles	各処肌肉	29	23
The Circulating system	運行血之器	41	41
The Venous system	廻血大小管	19	19
The Nervous system	脳体脳髓脳筋体用	64	47
Sense of sight	眼官体用	82	36
Sense of hearing	耳官体用	35	17
Sense of taste	口舌之官体用	19	4
Sense of smell	鼻官功用	22	8
Sense of touch	手知覚功用	8	0
The Organs of digestion	消化飲食之器	98	98
The Digestive function	食物消化功用	45	6
The Thoracic viscera	胸背心肺部位	77	72
On the circulation of the blood	血運行功用	50	18
Urinary apparatus	生溺生精之器	19	19
The secretions	全体津液	16	16
The general functions	総論功用	9	0
The human soul	人之靈魂	10	-
Names of external parts	外体名称	78	78
Terms used in medicine	内部病証名目	234	-
Terms used in surgery	外科名目	275	-
Surgical instruments	外科各器	66	-
Surgical operations	医治外証手法	76	-
Terms used in midwifery	婦科名目	76	34
Infantile diseases	小児初生病証	27	-
Names of medicines	薬品名目	238	-
Properties of medicines	薬之功力	28	-
Operations in pharmacy	炮製之法	13	-
Weights and measures	秤薬之器	24	-
Elements of natural science	博物之理	149	-
見出し語合計		2043	652

表2 『医学英華字釈』の各項目と見出し語数

『医学英華字釈』にある31の項目分類と、項目ごとに記される見出し語数を上記の表2にま

とめた<sup>9</sup>。『医学英華字釈』の各項目から、主に解剖学を扱うもののみをあげると、「全体之骨」「全体交節」「各処肌肉」「運行血之器」「廻血大小管」「脳体脳髓脳筋体用」「眼官体用」「耳官体用」「口舌之官体用」「鼻官功用」「消化飲食之器」「胸背心肺部位」「生溺生精之器」「全体津液」「外体名称」「婦科名目」の16項目で、合計791の見出し語を数える。また、主に生理学を扱う項目をあげると、「手知覚功用」「食物消化功用」「血運行功用」「総論功用」の4項目で、合計112の見出し語を数え、この中には解剖学に関する内容を扱う見出し語も含まれる。従って、合計で903の見出し語が、解剖学に関する内容を扱う可能性がある。

先述のように、『医学英華字釈』の各見出し語では、必ずしも単語レベルでの英中対照が施されてはならず、また、見出し語そのものが事象説明の場合があり、903の見出し語をもって解剖学用語の数とすることはできない。本稿では、903の見出し語を対照に、解剖学を主旨とするもののみを抽出し、表2に項目ごとにその見出し語数を併記した(表2中「解剖学」の名目とした)。結局、『医学英華字釈』において、解剖学を主旨とする見出し語は652を数えるに過ぎない。

### 3-1. 『全体闡微』の解剖学用語について

『全体闡微』巻末の anatomical vocabulary in English and Chinese は、解剖学体系ごとに解剖学用語がリストされていることから、解剖学体系ごとに解剖学用語数を以下の表3にまとめた。

英文項目名	中国文項目名	語彙数
general terms	総論	100
osteology	骨部	346
arthrolgy	骨節部	72
myology	肌部	310
terms used in the anatomy of hernia	小腸疝部	38
angiology (heart)	心脉部	33
angiology (arteries)	脉部	242
angiology (veins)	廻管部	97
angiology (the lymphatica)	吸管	7
neurology (brain)	脳部	68
neurology (nerve)	脳筋部	125
thorax	胸[月堂]部	42
organs of digestions	養生具	119
urinary organs	溺具	13
generative organs (male)	陽具	20
generative organs (female)	陰具	22
organs of sense	覚悟諸器	79
合計		1733

表3 『全体闡微』巻末 anatomical vocabulary in English and Chinese の語彙数

『全体闡微』の巻末にまとめられた anatomical vocabulary in English and Chinese は単語レベルでの英語-中国語対照表で、索引を兼ねたものである。これにリストされる語彙は学術用語としての体裁をもった解剖学用語で、1733 を数える。先の表 2 に示したように『医学英華字釈』が扱う解剖学を主旨とする見出し語数は 652 であるから、数字上の比較では、『全体闡微』の巻末にまとめられた anatomical vocabulary in English and Chinese にリストされる 1733 の解剖学用語の少なくとも三分の二弱は、オスグッド独自に訳出したものといえる。

ホブソンは nerve の訳語として「脳気筋」をはじめ「筋」「気筋」「脳筋」等、様々な訳語を用いていたように、中国語訳を厳格に確定したわけではない。一方、『全体闡微』では nerve(神経)の中国語訳を「脳筋」と確定した上で、この語を基盤に「頭顱脳筋」(脳神経)、「脊脳筋」(脊髄神経)等のように訳語を創出している。つまり、根幹となる若干の語彙はホブソンによる語彙をもとにし、あるいはより合理的な訳語に修正している<sup>10</sup>。

すでに述べたように、ホブソンによる『医学英華字釋』は単語レベルでの英中対照の辞書ではなく、事象説明の項目を多数含むものであった。また原語の医学用語に対しても中国語による字釈が主旨であって、必ずしも学術用語としての体裁をもった中国語訳が創出されていなかった。つまり、『医学英華字釈』が、本格的な学術用語の確立を主旨としたものではなかったのに対して、『全体闡微』では解剖学用語の中国語訳の確定を目指したものであり、これは当時の医療宣教師の活動の中で標準となるものを樹立する意図による。そして、少なくとも後のカーを中心とする医療宣教師の間では、この意図を支持している。

### 3-2. 『全体闡微』の神経系に関する解剖学用語

次に、『全体闡微』の神経系に関する解剖学用語に焦点を絞って論じたい。『全体闡微』は本格的な人体解剖学の専門書であるから神経に関する体系は極めて明確に示されており、脳に関するもの、脊髄に関するもの、脳神経に関するもの、脊髄神経に関するもの、交感神経に関するものの基本分類ごとに展開されている。以下に『全体闡微』巻末 anatomical vocabulary in English and Chinese の「脳部」「脳筋部」にリストされる 184 語(本来は 193 語がリストされるが、このうち 9 語は脳血管に関するものであるために除外した)を対象に、神経系の分類ごとに解剖学用語数を示した。比較としてホブソンの『医学英華字釈』の神経系に関する見出し語数も、該当する分類ごとに括弧内に併記した(両者の語彙は必ずしも同一ではない)<sup>11</sup>。詳細は、本稿の最後に対照表 1~5 としてまとめた。

- [脊髄に関するもの] …8語 (8)  
 [脳神経に関するもの] …57語 (11)  
 [脊髄神経に関するもの] …33語 (3)  
 [交感神経に関するもの] …35語 (1)

『全体闡微』では、nerve(広義の神経)、cranial nerve(脳神経)、spinal nerve(脊髄神経)、そして sympathetic nerve(交感神経)を、それぞれ順に「脳筋」「頭顱脳筋」「脊脳筋」「自和脳筋」の中国語訳に確定している。これらは神経系の内容を伝えるために必須の語彙である。しかし、ホブソンの『全体新論』をはじめとする『西医五種』、ならびに『医学英華字釈』では、これらを体系的に伝える中国語訳が示されなかった。そして、最も基本となる nerve(神経)を意味する中国語訳も「脳気筋」「脳筋」「気筋」「筋」等、様々なものが用いられており、一貫性に欠くばかりでなく、解剖学的にも不明確であった。『全体闡微』では人体解剖学の専門書に相応しい内容が示され、解剖学的定義を述べてから解剖学用語を提示するという極めて明確な論述形式を採用している。例えば、『全体闡微』「脳論」の冒頭で述べられるものを次に示す。

居於頭顱骨内者曰腦。居於脊骨内者曰腦根。由腦分出小支曰頭顱脳筋。由腦根分散小支曰脊脳筋

これで定義される「脳根」「頭顱脳筋」「脊脳筋」が、それぞれ順に今日のいう脊髄、脳神経、脊髄神経を指すものであることは極めて明確である。続けて、

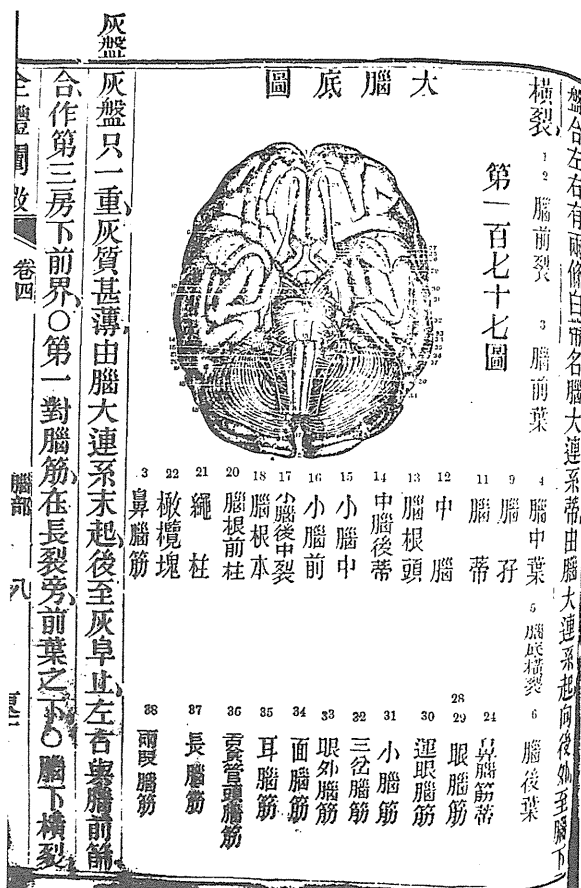
更有一類。在脊旁処。約数十脳結。分出脳筋。互通。並佈於臟腑。血管等処。自行其功用。不由人意者。曰自和脳筋

とある定義では、「脊旁処」(脊骨近傍)より伸び、「脳結」(神経節)を複数有し、内臓や血管等に分布し、不随意性をもつという「自和脳筋」(交感神経)の特徴を明確に述べている。

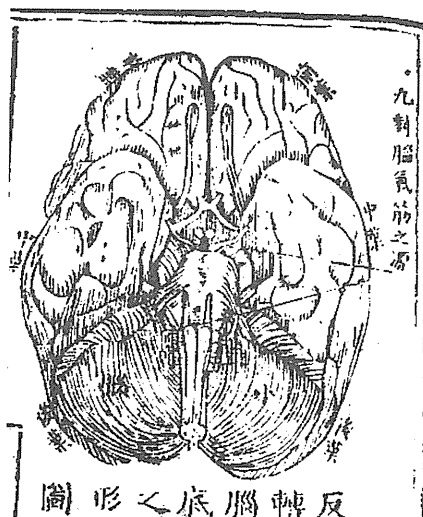
ホブソンがその編訳書で広く用いた「脳筋」の語は、神経系の体系を十分に考慮したものではなかった。そして、「脳筋」の本来の語義は「脳から伸びる筋」であるが、しばしば広義の神経を指す語としても用いられていた。つまり、「脳筋」の本来の語義は、脳神経に限定されるはずのものであり、これを広義の神経を指す語として用いることは不適切である。また、仮に nerve(広義の神経)を「脳筋」の訳語に定めたのであれば、cranial nerve(脳神経)に対する訳語は「脳

「脳筋」とすべきであるが、この語には修辞上の問題が生じてしまう。しかし、ホブソンは cranial nerve(脳神経)の訳語を明確に定めることなく曖昧にやり過ぎている。

一方、オスグッドは、ホブソンによる「脳筋」を nerve の訳語と定めた上で、神経系の一連の解剖学用語の中国語訳を定義しているが、ホブソンによる「脳筋」の語のもつ問題に一応の注意が及んでいる。そして、ホブソンで不明確であった cranial nerve の訳語に対して、「頭顱脳筋」の訳語を定めている。もしホブソンの格式に従えば、cranial nerve の訳語は「脳-脳筋」と定まるが、オスグッドではこの語の接頭語「脳-」を「頭顱」で置き換え、修辞上の問題を避けている。ただし、「頭顱」の接頭語で置き換えたことによって、脳から直接伸びることが表現されなくなり、解剖学上の的確さに欠くという問題が生じたこととなる。つまり、ホブソンによる「脳筋」の語に内在する問題は、より高度な解剖学用語の中国語訳創出にとって深刻な影響をもたらしている。



『全体闡微』「大脳底圖」  
(脳底各部の詳細を伝える)



『全体新論』「反轉腦底之形圖」  
(脳底の概要のみを伝える)

次に、spinal nerve(脊髄神経)の訳語をみると、『医学英華字積』ではごく一部で「髓筋」としているものの、大部分では『全体新論』と同様に「脳気筋」「脳筋」等を用いており、これは「脳筋」本来の語義に明らかに反する。つまり、『全体新論』では脳神経に対して、脊髄神経の概念を特別に区別する訳語を定めておらず、文脈によって脊髄神経の概念を間接的に伝えるにとどまっている。『医学英華字積』でごく一部で用いられた「髓筋」の訳語についてみても、「髓」の語そのものが脳髄と脊髄の両者を含む性質のものであるから、やはり問題がある。これに対してオスグッドの定めた「脊脳筋」の訳語は、ホブソンにみる問題を一応は回避したものとなっているが、しかし、脊髄神経は厳密には、脊骨からではなく、脊髄から伸びるものであるから、やはり解剖学上の的確さに欠いたものである<sup>12</sup>。

次に、sympathetic nerve(交感神経)の訳語をみると、『全体新論』では「白筋」や「多節白筋」の語が用いられている。神経繊維が白色であるという特徴は、交感神経に限ったものではないために適切な訳語とはいえない。『医学英華字積』に出現する「臟腑百節筋」の訳語も、厳密には交感神経が臟腑だけではなく、全身に広く分布するものであるから、必ずしも適切な訳語とはいえない。これに対してオスグッドは、交感神経に備わる最大の特徴である自律的性質を「自和」と表現し、交感神経に対する訳語を「自和脳筋」と定めており、一応の合理性をみる。

#### 4. 結び

最後に、本稿で検討した『全体闡微』の巻末にある英中解剖学用語対訳表 anatomical vocabulary in English and Chinese の「脳部」「脳筋部」にリストされる184語(本来は193語がリストされるが、このうち9語は脳血管に関するものであるために、ここでは除外した)を、以下に対照表1~5としてまとめた。この対訳表では、神経系の解剖学分類ごとに解剖学用語がリストされているため、以下の対照表1~5では、この分類に従ってまとめた。比較として、『医学英華字積』にある該当の語彙を併記した(『医学英華字積』に示される原語と、『全体闡微』巻末対訳表に示される原語で、一致するもののみを対象とした)。本稿では、原語が明記された解剖学用語に限定したために、『全体闡微』巻末にある対訳表 anatomical vocabulary in English and Chinese のみを検討対象としたが、本文にはこの対訳表にリストされない解剖学用語の中国語訳が多数みられる。つまり、『全体闡微』では、1733語をはるかに上回る解剖学用語が、中国語に訳出されている。これらについては、今後の検討課題としたい。

なお本稿は、拙稿「ホブソン(合信)にみる解剖学的語彙について」(『或問』11号)で検討した『西医五種』および『医学英華字積』にみる解剖学的語彙に関する問題を踏まえたものである。併せて参照されたい。



『全体闡微』原語	『全体闡微』中国語	『医学英華字釈』中国語	現代日本語(参考)
the encephalon	腦	—	腦
cerebrum	大腦	大腦之体	大腦
cerebellum	小腦	小腦	小腦
pons varolii	中腦	—	橋
medulla oblongata	腦脊根頭	大腦小腦之蒂即髓頭	髓腦
membranes of brain	腦諸衣	腦胞三層	腦膜
dura mater	腦筋衣	腦之外胞膜	腦硬膜
arachnoid	腦湿衣	腦[月夾]膜	腦クモ膜
pia mater	腦血衣	腦之内胞膜	腦軟膜
falx cerebri	大腦[金囊]膜	—	大腦鎌
falx cerebelli	小腦[金囊]膜	—	小腦鎌
tentorium	小腦帳膜	—	小腦テント
anterior pyramids	前柱	—	延髓錐体
olivary body	橄欖塊	—	オリブ
restiform bodies	繩柱	—	索状体
posterior pyramids	後柱	—	薄索
convolutions of cerebrum	廻紋	腦外面浅深盤曲之皺	大腦回
sulci of cerebrum	紋中隙	—	大腦溝
great longitudinal fissure	大長中隙	—	大腦縱裂
corpus callosum	腦大連系	—	腦梁
peduncles of cerebrum	大連系蒂	—	広義の大腦脚
lamina cinerea	灰盤	—	終板
cerebrum continued	大腦下面	腦底	大腦下面(腦底)
fissure of sylvius	腦下横裂	—	大腦横裂
anterior pyramids perforated space	腦前篩	—	前有孔質
optic commissure	眼会根	—	視神經交叉
tuber cinereum	灰阜	—	灰白隆起
infundibulum	腦卮	—	漏斗
pituitary body	鞍核	—	腦下垂体
corpora albicantia	腦子	—	乳頭体
post.perforated space	腦後篩	—	後有孔質
crura cerebri	大腦蒂	—	大腦脚
interior of cerebrum	大腦裏	—	大腦内部
lateral ventricles	左右房	腦左右大房	側腦室
anterior cornu	前角	大房前角形	前角(前頭角)
post cornu	後角	大房後角形	後角(後頭角)
corpus striatum	腦前結	—	線条体
choroid plexus	血[巾白]網	—	脈絡叢
thalami optici	腦後結	—	視床
fornix	三角筋	—	腦弓
septum lucidum	透明膜	—	透明中隔
fifth ventricle	第五房	—	透明中隔腔
velum interpositum	腦[巾白]	—	第三腦室脈絡組織
third ventricle	第三房	—	第三腦室
pineal gland	鞍核	—	松果体
carpora quedrigemina	双孖	—	四丘体(中腦蓋)
carpora geniculata	豆核	—	膝状体
incisura cerebelli ant.	小腦前缺	—	前小腦切痕
incisura cerebelli post.	小腦後缺	—	後小腦切痕
fourth ventricle	第四房	両小房	第四腦室
peduncles	小腦蒂	—	小腦脚

対照表 1 脳に関するもの

『全体蘭微』原語	『全体蘭微』中国語	『医学英華字积』中国語	現代日本語(参考)
spinal cord	脳脊根	脊骨髓	脊髓
anterior median fissure	前中隙	脊髓前縫	前正中裂
posterior median fissure	後中隙	脊髓後縫	後正中溝
lateral median fissure	旁隙	—	前後外側溝
anterior column	前柱	脊髓前柱	前柱
lateral column	旁柱	—	側索
posterior column	後柱	脊髓後柱	後柱
posterior median column	後中柱	—	薄索

対照表 2 脊髓に関するもの

NEUROLOGY (Nerves)	腰脚筋網	胸脚筋網	尻大脚筋	小腰後脚筋	頸上自和脚筋	頸中自和脚筋	頸下自和脚筋	頸上自和脚筋	頸中自和脚筋	頸下自和脚筋
Ilio-hypogastric										
.. inguinal										
Genito-crural										
Anterior ..										
Obligator										
Superior gluteal										
Pubic										
Small sciatic										
Great ..										
Internal popliteal										
Short saphenous										
Anterior tibial										
Posterior ..										
Internal plantar										
External ..										
Sympathetic Nerve										
The ophthalmic ganglion										
Spheno palatine ..										
Otic ..										
Submaxillary ..										
Superior										
Inferior										
Middle										
Carotid plexus										
Common ..										
Right superior cardiac nerve										
Left .. ..										
Medial .. ..										
The great cardiac plexus										
.. .. splanchnic nerve										
.. lesser .. ..										
Smallest .. ..										
Motor plexus										
Neufmann ganglia										

『全体蘭微』

anatomical vocabulary in English and Chinese

「脳筋部」より

The investing membranes.	脳膜三層
Dura mater or outer membrane	脳之外膜
Arachnoid or double investing ditta.	脳膜
Pia mater or inner investing ditta.	脳之内膜
The summit and base of the brain.	脳頂脳底
The size of the brain.	脳體比較 或大或小
The weight of the brain.	脳體重量
The consistence of the brain.	脳質堅軟
The external convolutions.	脳外面淺深盤曲之綫
The anterior and posterior fissura.	脳前後縫
The two hemispheres.	脳左右兩枚
Anterior middle and posterior lobes.	脳前中後葉
Horizontal and vertical section.	腦橫割直割所見
White and grey matter.	腦白色灰色
Great commissure or connecting fibres.	兩枚中相連之絲
The lateral ventricles.	腦左右大房
Anterior middle and posterior cornua.	大房前中後角形
The small ventricles.	兩小房
The cerebellum or little brain.	小腦
Two lateral lobes.	小腦左右兩枚
Internal pinnated leaf appearance.	小腦割綫紋似葉
Medulla oblongata or head of spinal cord.	大脳小腦之蒂即髓頭
The spinal cord or marrow.	脊骨髓
The investing membranes of the cord.	脊髓内外膜
Anterior and posterior fissura.	脊髓前後縫
Appearance of a cross section.	橫割脊髓所見
Grey and white matter.	脊髓灰白色
Anterior and posterior columns.	脊髓前後兩柱
Anterior column or seat of motion.	前柱運動功用
Posterior column or seat of sensation.	後柱知覺功用

『医学英華字积』

「脳体脳髓脳筋体用」より

『全体闡微』原語	『全体闡微』中国語	『医学英華字訳』中国語	現代日本語(参考)
cranial nerves	頭顱十二对脳筋	左右脳気筋	脳神経
1st olfactory	第一对即鼻脳筋	第一对入鼻孔司[鼻臭]	第1脳神経/嗅神経
2d optic	第二对即眼脳筋	第二对入眼司見	第2脳神経/視神経
3d motor oculi	第三对即運眼筋	第三对運眼上胞	第3脳神経/動眼神経
4th pathetic	第四对即小脳筋	第四对運転眼肉	第4脳神経/滑車神経
5th trifacial or trigemini	第五对即三岔筋	第五对入頭面司運動	第5脳神経/三叉神経
6th abducens	第六对即眼外筋	第六对入眼直肉	第6脳神経/外転神経
7th facial or portio dura	第七对即面脳筋	第七对入頭面司運動	第7脳神経/顔面神経
8th auditory or portio mollis	第八对即耳脳筋	第七对又一支入耳司聽	第8脳神経/内耳神経
9th glosso-pharyngeal	第九对即食管頭脳筋	—	第9脳神経/舌咽神経
10th pneumogastric or par vagum	第十对長脳筋	第八对入心肺胃	第10脳神経/迷走神経
11th spinal accessory	第十一对兩段筋	—	第11脳神経/副神経
12th hypoglossal	第十二对鼻脳筋	第九对運動舌	第12脳神経/舌下神経
olfactory bulb	鼻脳筋蒂	—	嗅球
commissure	眼会根	—	交連
optic tract	眼帶	—	視索
ophthalmic	目脳筋	—	眼神経
lachrymal	涙脳筋	—	涙腺神経
frontal	額脳筋	—	前頭神経
nasal	鼻脳筋	—	鼻毛様体神経
ganglia	脳筋結	—	神経節
meckels ganglia	蝴蝶顎結	—	翼口蓋神経節
otic ganglia	卵孔下結	—	耳神経節
submaxillary ganglia	下牙床下結	—	顎下神経節
superior maxillary	上牙床脳筋	—	上顎神経
orbital nerve	眼窩脳筋	—	眼窩下神経
spheno palatine	蝴蝶顎脳筋	—	翼口蓋神経
posterior dental	牙後脳筋	—	後上歯槽枝
anterior dental	牙前脳筋	—	前上歯槽枝
palpebral	眼胞脳筋	—	眼瞼枝
nasal	鼻脳筋	—	鼻枝
labial	唇脳筋	—	唇枝
inferior maxillary	下牙床脳筋	—	下顎神経
anterior division	前支	—	前深側頭神経
posterior division	後支	—	後深側頭神経
auriculo-temporal	耳太陽脳筋	—	耳介側頭神経
gustatory	別味脳筋	—	舌神経
inferior dental	下牙脳筋	—	下歯槽神経
tympanic	耳膜脳筋	—	鼓索神経
posterior auricular	耳後脳筋	—	後耳介神経
digastric	双腹肌脳筋	—	二腹筋枝
stylo hyoid	錐舌肌脳筋	—	茎突舌骨筋枝
temporo facial	太陽面脳筋	—	側頭枝
cervico facial	頸面脳筋	—	頸枝
carotid	頸脈管脳筋	—	頸動脈洞枝
pharyngeal	食管頭脳筋	—	咽頭枝
tonsillar	杏仁核脳筋	—	扁桃枝
lingual	舌脳筋	—	舌枝
pharyngeal	食筋頭脳筋	—	咽頭枝
superior laryngeal	声管上脳筋	—	上咽頭神経
recurrent laryngeal	声管穹廻脳筋	—	反回神経
cervical cardiac	頸心脳筋	—	上頸心臓枝
thoracic cardiac	胸[月堂]心脳筋	—	胸心臓枝
anterior pulmonary	肺前脳筋	—	肺神経叢
posterior pulmonary	肺後脳筋	—	肺神経叢
esophageal	食管脳筋	—	食道枝
gastric	胃脳筋	—	胃枝

対照表 3 脳神経に関するもの

『全体闡微』原語	『全体闡微』中国語	『医学英華字釈』中国語	現代日本語(参考)
spinal nerves	脊脳筋	左右髓筋	脊髓神経
cervical plexus	頸脳筋網	—	頸神経叢
supra colli	頸上脳筋	—	頸横神経
auricular magnus	耳大脳筋	—	大耳介神経
occipitalis minor	枕小脳筋	—	小後頭神経
supra clavicular	鎖柱上脳筋	—	鎖骨上神経
communicans noni	肌纏脳筋	—	頸神経わな
phrenic	膈脳筋	—	横隔神経
brachial plexus	臂脳筋網	—	腕神経叢
anterior thoracic	胸[月堂]前脳筋	—	長胸神経
sub scapular	肩胛下脳筋	—	肩甲上神経
circumflex	弯廻脳筋	—	回旋枝
median	臂中脳筋	—	正中神経
ulnar	正肘脳筋	—	尺骨神経
musculo-spinal	肌纏脳筋	—	筋皮神経
intercostal nerves	脇中諸脳筋	—	肋間神経
lumbar plexus	腰脳筋網	—	腰神経叢
ilio-hypogastric	跨腹脳筋	—	腸骨下腹神経
ilio-inguinal	跨[月夾]脳筋	—	腸骨鼠径神経
genito-crural	陰陽[月過]脳筋	—	陰部大腿神経
anterior crural	[月過]前脳筋	—	大腿神経
obturator	盆脳筋	—	閉鎖神経
sacral plexus	鈎脳筋網	—	仙骨神経叢
superior gluteal	臀上脳筋	—	上臀神経
pubic	陰陽脳筋	—	陰部神経
small sciatic	尻小脳筋	—	下臀神経
great sciatic	尻大脳筋	—	坐骨神経
internal popliteal	膕内脳筋	—	総腓骨神経
short saphenous	[月過]短脳筋	—	伏在神経
anterior tibial	小腿前脳筋	—	浅腓骨神経
posterior tibial	小腿後脳筋	—	脛骨神経
internal plantar	脚下内脳筋	—	内側足底神経
external plantar	脚下外脳筋	—	外側足底神経

対照表 4 脊髓神経に関するもの

『全体闡微』原語	『全体闡微』中国語	『医学英華字積』中国語	現代日本語(参考)
sympathetic nerve	自和脳筋	臟腑百節筋	交感神経
the ophthalmic ganglion	自和眼結	—	眼動脈神経節
spheno palatine ganglion	蝴蝶顎結	—	翼口蓋神経節
otic ganglion	卵孔下結	—	耳神経節
submaxillary ganglion	下牙床下結	—	顎下神経節
superior ganglion	頸上自和脳結	—	上頸神経節
inferior ganglion	頸下自和脳結	—	下頸神経節
middle ganglion	頸中自和脳結	—	中頸神経節
carotid plexus	頸脉自和脳筋網	—	総頸動脈神経叢
cavernous plexus	曲槽自和脳筋網	—	頸神経叢
right superior cardiac nerve	心上右自和脳筋	—	上頸心臓神経
left superior cardiac nerve	心上左自和脳筋	—	上頸心臓神経
middle superior cardiac nerve	心中自和脳筋	—	中頸心臓神経
inferior cardiac nerve	心下自和脳筋	—	下頸心臓神経
the great cardiac plexus	心大脳網	—	心臓神経叢
the great splanchnic nerve	臟腑大脳筋	—	大内臓神経
the lesser splanchnic nerve	臟腑中脳筋	—	小内臓神経
smallest splanchnic nerve	臟腑小脳筋	—	最小内臓神経
semilunar ganglia	半月結	—	半月神経節
solar plexus	腹大脳網	—	腹腔神経叢
phrenic plexus	膈脳網	—	横隔神経叢
coeliac plexus	腹短総脉脳網	—	腹大動脈神経叢
gastric plexus	胃脳網	—	胃神経叢
hepatic plexus	肝脳網	—	肝神経叢
splenic plexus	脾脳網	—	脾神経叢
suprarenal plexus	腎上核脳網	—	副腎神経叢
renal plexus	腎脳網	—	腎神経叢
sup, mesenteric plexus	大小腸上脳網	—	上腸間膜動脈神経叢
inf, mesenteric plexus	大小腸下脳網	—	下腸間膜動脈神経叢
spermatic plexus	卵自和脳網	—	精索動脈神経叢
pelvic portion of sympathetic	左右盆脳網	—	下腹神経叢(骨盤神経叢)
hypogastric plexus	腹中下脳網	—	上下腹神経叢
hemorrhoidal plexus	直腸脳網	—	直腸神経叢
prostatic plexus	膀胱底核脳網	—	前立腺神経叢
vaginal plexus	陰道脳網	—	子宮膣神経叢

対照表 5 交感神経に関するもの

【注】

<sup>1</sup> ホブソンによる『全体新論』(1851)、『博物新編』(1855)、『西医略論』(1857)、『婦嬰新説』(1858)、『内科新説』(1858)は、一般に「西医五種」の名称で知られるが、これら全てが刊行された後には、合本の『医書五種』として羊城博濟医局を中心に販売されている。例えば、1889年(光緒十五年)刊行(再版)のカーによる『内科闡微』には、巻末に羊城博濟医局刊行の複数の中国文西洋医学書の広告があり、これらホブソンによる書を『医書五種』と呼んでいる。また、民国期には『西医五種』と題した合本(南京中医薬大学図書館蔵)が刊行されている。こうした背景から、本稿では『西医五種』と表記した。

<sup>2</sup> 合信『全体新論』江蘇上海墨海書館蔵版 1851(咸豊元年)参照。

<sup>3</sup> 例えば『全体闡微』のオスグッドによる自序に「合信氏、曾著全体新論一書、搬西医之大略」とあ

る(柯為良『全体闡微』福州聖教医館蔵板 1881 上海図書館蔵等参照)。また、カーらが羊城博濟医局を中心に刊行した一連の中国文西洋医学書では、臨床に耐える専門レベルの医学を扱うが、これは『西医五種』があくまで西洋医学の概略しか伝えなかったことを受けてのものである。

4 「ウェルカム図書館蔵ホブソン文書を用いたベンジャミン・ホブソン伝」『総合文化研究所年報』第11号、青山学院女子短期大学2003、101頁によると、ホブソンの中国での宣教活動は1858年末までである。

5 『全体闡微』のH. T. Whitneyらの英文序によれば、この書は1877年に上海で開催された来華宣教師の会議で決議された要請を受けて編纂されたものである。そして、オスグッドは『全体闡微』の構成と巻一・巻二、および巻末の“anatomical vocabulary in English and Chinese”を書き終えたところで急逝し(1880年8月)、残りの巻三から巻六は、Whitneyらの手によって完成したという。また、『全体闡微』がモチーフとしたのは、Henry Grey(英1825?~61), *Anatomy, descriptive and surgical* であるという。原書と『全体闡微』との関係は、別稿で詳しく論じたい。なお、『全体闡微』の自序に「因薈萃近年英美所出各書、翻訳…顔曰全体闡微」とあるように、オスグッドの頃、英・米ではより最新の各医学書が刊行されており、これをもとに編訳したのが『全体闡微』で、『全体新論』よりも新しい内容の人体解剖学を扱っている。なお、『全体闡微』には1905年の縮刷再版本がみられるが、初版本巻末 anatomical vocabulary in English and Chinese は省かれている。巻構成は、初版の巻一・二、巻三・四、巻五・六をそれぞれ統合して全三巻としているが、内容そのものに異同はみられない。

6 吉田寅『中国プロテスタント伝道史研究』汲古書院1997、298頁参照。

7 前掲吉田寅稿298頁参照。

8 例えば「脳体脳髓脳筋体用」の見出し語をみると、the many knotted or sympathetic nerve(中国文字積；臟腑百節筋)に続き、the brain is the instrument of the soul(中国文字積；腦為靈性之機)とあるように、用語レベルの見出し語と文章レベルでの見出し語が任意に掲載される。

9 Benjamin Hobson, *A medical vocabulary in English and Chinese* (『医学英華字積』)Shanghai Mission Press1858(立教大学図書館海老沢文庫蔵)参照。

10 例えば、ホブソンが動脈・静脈・毛細血管をそれぞれ「血脈管」「廻血管」「微絲管」と訳出しているのに対して、オスグッドはそれぞれ「脈管」「廻管」「微管」と訳出し、より合理化を図っている。また、ホブソンによる(広義の)神経に対する訳語には、主要な「脳気筋」「脳筋」の他、「気筋」「筋」の語もみられるが、オスグッドでは「脳筋」に定められている。そして、ホブソンによる交感神経の訳語は「臟腑百節筋」であり、ホブソンが自ら用いた神経の訳語「脳気筋」ないしは「脳筋」を合理的に反映させてはいない。一方、オスグッドは交感神経を「自和脳筋」と訳出している。またさらに、消化器の訳語についてみれば、ホブソンが「消化飲食之器」としたのに対して、オスグッドでは熟語として「養生具」と訳出している。

11 『全体闡微』巻末の対訳表は、必ずしも本文に出現する訳語の全てをリストしておらず、特に脊髄に関する用語の多くはリストからもれており、唯一の欠点といえよう。詳細は別稿で論じたい。

12 『素問』『靈樞』では「髓」「骨髄」あるいは「脊中」の語が、脊髄を含む概念であり、「脊」は脊椎骨あるいは脊椎骨を含む脊柱起立筋等の脊椎骨近傍を指す概念である。『重廣補註黄帝内経素問』(『四部叢刊』明翻北宋本影印)上海商務印書館1935、『靈樞經』(『四部叢刊』明趙府居敬堂刊本影印)上海商務印書館1935参照。